

岩内町郷土館令和6年度第三回企画展
岩内大火復興七〇周年記念展

生まれ変わる岩内

復興の 原動力



期間：令和6年（2024）9月7日（土）～11月24日（日）



岩内町郷土館 令和6年度第3回企画展

生まれ変わる岩内 復興の原動力

ご挨拶

はじめに、今から七〇年前に発生した「岩内大火」という大災害にて尊い命を落とした殉職者、犠牲者の御霊に心より哀悼の意を捧げます。

戦後日本で発生した大火のうちでも、三大大火の一つとなった「岩内大火」の日から、2024(令和6)年は70周年の節目を迎えました。

その日、1954(昭和29)年9月26日は、津軽海峡で連絡船洞爺丸が沈没し、千人以上の犠牲者を出す我が国最悪の海難事故が発生。台風十五号の猛威はそれだけにとどまらず、同日、この岩内町では市街地の八割を焦土と化す、大火災となりました。焼失家屋3,300戸余、罹災者の数は17,000人余。岩内町に住む人々のおよそ七割が、家を焼き、職場を焼き、培ってきた財を失ってしまいました。

絶望の淵にあった岩内町が、70年後の今、このようにあることは、ひとえにあの日ゼロから立ち上がった当時の人々が、苦心しながらも新しい町を築き上げてきたお陰です。この町にとどまり、ゼロどころかマイナス(借金)から商売を始める人々。また、この大火が原因で心ならず町を去る人も多く、遠くから故郷を思うほかになかった人々。そして、町の復興のために大小の支援の手を差し伸べてくれた自衛隊、日赤、全国各地の人々。岩内大火の「復興の原動力」とは、まさに有名無名の「人々」でありました。一人一人が立ち上がり、支え合ってきたことが歴史となり、町は継続発展してきたのです。

歴史には光と影があり、良い事ばかりがあった訳ではありません。大火の処理は後年、町財政の大きな負担となりました。現在もお各所に残る改良住宅の空家が無くなり、土地の再開発があってこそ大火処理の終了、という見方もあります。七〇年という長い歳月に、災害の記憶も失われかねません。しかし当時の記録はもちろん、40、50、60周年と迎えるその都度に、大火を語り継ごうと思い、行動してきた人々によって、大火の歴史資料は風化を免れてきました。

この度は、町外より陸上自衛隊北部方面隊様、日本赤十字社北海道支部様より貴重な資料もご提供いただきました。改めて歴史を遺した先人、そしてご協力下さった皆様に心より感謝申し上げます。

「大火は、町が新しく生まれ変わった記念の日でもある」という方もありました。さらにまた新しい未来へ向け、岩内大火の記憶がご覧になる皆様の心に、少しでも残っていくことを切に願います。

2024(令和6)年9月7日

岩内町郷土館

昭和29年9月26日 岩内町大火殉難者		斎藤 栄恵	加藤 重一郎
		沢口 正	斎藤 清作
		小塚 昌利	竹内 義顕
		江尻 由太郎	池田 久作
		池田 みわ	池田 久次
		池田 久司	池田 タミ
		松村 誠一郎	鈴木 ナツ
		鳥井 キク	山本 おは
		山本 コヨ	瀬川 ナオエ
		瀬川 智恵子	瀬川 邦隆
		瀬川 祥子	中里 ヒサ
		梅村 五三郎	吉田 光美
		菊地 富美	菊地 瑞穂
		菊地 武一郎	菊地 トメノ
		菊地 昌一	穴戸 ソヨ
		相原 悦野	高田 ふゆの
		森下 熊太郎	朝妻 卯八
		清水 ナカ	
		謹んで哀悼の意を表します	

岩内大火とその直後 1954・9・26～27

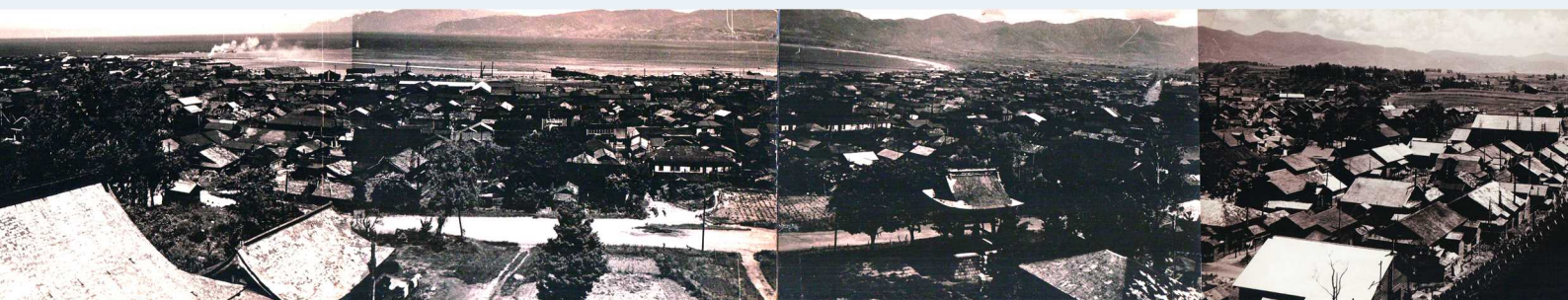


一夜にして焦土となる



岩内大火の概要

焼失面積…32万坪（約105万㎡）
 焼失家屋…3,298戸
 罹災人口…17,223人
 （29年人口24,062人 罹災率72%）
 死者…35名
 行方不明者…3人
 負傷者…551人
 漁船被害…135隻
 被害総額…約98億円（現在の五百億円相当）



昭和29年6月 大火前、光照寺付近より見た岩内市街地と岩内港



昭和29年9月26日の大火後、東山本弘寺付近より見た岩内市街地と岩内港

「洞爺丸台風」

この時の台風15号は別名「洞爺丸台風」と呼ばれた。日本を縦断するように北上し、北海道へ上陸する頃には最大級に発達した台風は、各地に大きな被害を与えた。9月26日18時39分、函館を出航した青函連絡船洞爺丸が、台風15号の猛烈な嵐に煽られ、七重浜沖で座礁、沈没。千人以上の犠牲者を出し、全国的に大きく報道された。岩内町大火のニュースは、通信網の寸断もありこれよりやや遅れて伝わり、その内容も、初期は部分的に誤って報道されていたが、徐々にその被害の甚大さが知られるようになっていった。

昭和29年9月27日
 北海道新聞号外





港のドラム缶爆発炎上

大火を体験した人が、ほぼ同じ体験を話すのが「港で爆発炎上があった」という話である。当時岩内港には、船の燃料の入ったドラム缶が沢山あり、港への延焼でそこにあった重油やガソリンに引火、次々と花火のように凄まじく爆発炎上した。

爆発は新たな飛び火を無数に生み、繫留されていた漁船に燃え移った。燃えた船は風に流され、次々と港を出て大浜の海岸へ。東側からの更なる延焼を招いた。台風の強風と一晩で回った風向きの変化が、岩内大火という最悪の結果をもたらしたのである。



昭和26年頃（大火前）の岩内港 密集する漁船群



現在の阿久津倉庫。右は大火直後の写真（大浜付近を拡大）

大浜の阿久津倉庫

現在も残る大浜の阿久津倉庫は、火災に追い詰められた人々が逃げ込み、倒壊することなく奇跡的に人々を救った建物である。親からはぐれた小さな子供から老人まで、約80人もの命を救った。倉の南側は崖になっており、ここを登り切れなかった多くの人が亡くなった。

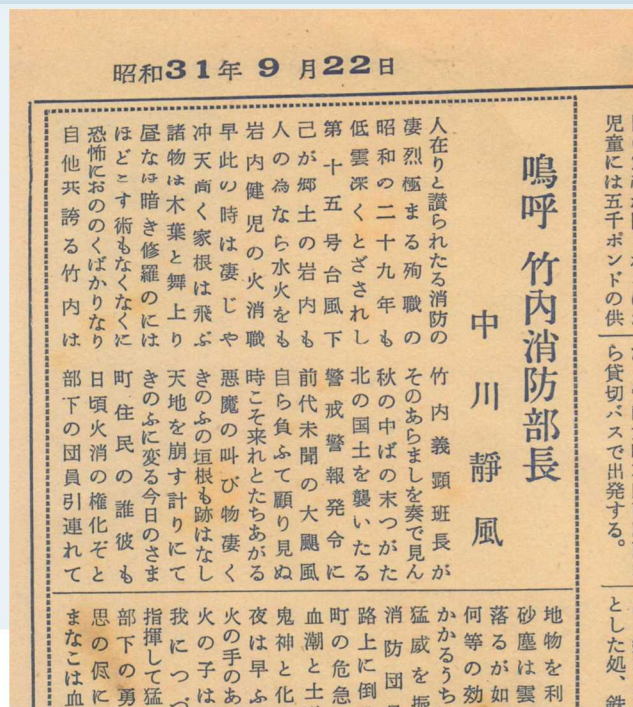


決死の消防活動

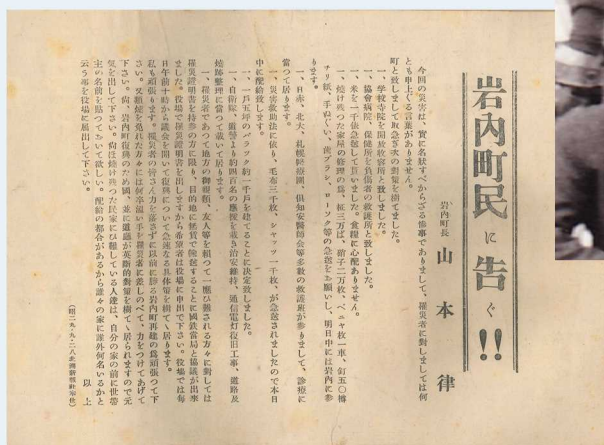
「諸物は木の葉と舞い上がり 天地を崩すばかりにて 昼なお暗き修羅の庭 昨日に変わる今日の様 ほどこす術もなくなく 町住民の誰彼も 恐怖におののくばかりなり」（昭和31年9月22日付『北潮新報』）

当時消防団班長であった竹内義顕氏は、深夜にわたる消防活動の中殉職された。鎮火後に行方不明となっていたが、火の海の中、万代付近で必死に避難民を誘導していた目撃情報から捜索、焼跡で遺体と消防の帽章、刺子のバンドが見つかった。冒頭の詩は大火後、消防長の中川伊吉氏が、竹内氏の殉職を悼み詠んだ詩であり、大火の壮絶さが伝わる内容である。

竹内氏をはじめとする消防団3名の殉職、そして東山の崖下で火と煙にまかれた町民など、この岩内大火では38名の犠牲者が出る痛ましい災害となった。



9月28日付『町民に告ぐ』



岩内町長 山本律

27日未明、山本町長は出張先の札幌で大火の報せを受けた。通信が途絶され詳細が不明な中、道庁や道議会へ支援を要請、8時半に道警本部の車に乗乗して急ぎ帰町した。そして直ちに緊急町議会を開き、対策を練った。その町職員も多くも、罹災者であった。

28日付で山本町長は「町民に告ぐ」とした印刷物を町内に配布、食糧、避難所の確保、そしてこの困難の中からともに復興しようと町民へ呼びかけた。

「町民に告ぐ!! 岩内町長 山本律 町といたしまして、取り急ぎ次の対策をたてました。

- 一、学校寺院を開放収容所と致しました。
- 一、協会病院、保健所を負傷者の救護所と致しました。
- 一、米を一千俵急送してもらいました。食糧に心配ありません。
- 一、焼け残った家屋の修理のため、桎（屋根材）三万ば、ガラス二万枚、ベニヤ板一車、釘五〇樽、チリ紙、手ぬぐい、歯ブラシ、ローソク等の急送をお願いし、明日中には岩内に参ります。
- 一、日赤、北大、札幌医療団、俱知安医師会等多数の救護班が参りまして、診療に当たっております。
- 一、災害救助法により、毛布三千枚、シャツ一千枚が急送されましたので、本日中に配給いたします。
- 一、一戸五坪のバラック約一千戸を建てることに決定いたしました。
- 一、自衛隊、道警より約四百名の応援を頂き治安維持、通信電灯復旧工事、道路及び焼跡整理に当たって頂いております。
- 一、罹災者であって地方のご親類、友人等を頼って一応避難される方々に対しては、罹災証明書を持参の方に限り、目的地に無賃で輸送することに国鉄当局と協議ができました。役場で罹災証明書を出しますから、希望者は役場に申し出て下さい。役場では毎日午前十時から議会を開いて復興について急速なる具体策を立てております。

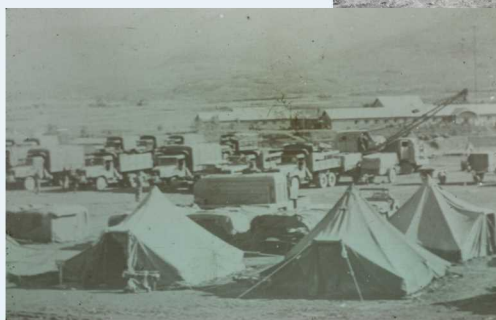
私も頑張ります。罹災者の皆さん力を落とさずに、以前に勝る岩内町再建のため頑張ってください。また、類焼を免れた方々には何卒温かい手を罹災者に差し伸べて、力をつけてあげて下さい。なお、岩内町復興のため国、並びに道庁が英断的対策を立てておられますので元気を出して下さい。」

陸上自衛隊の災害派遣

自衛隊の派遣は27日早朝より、通信隊60名の派遣からはじまり、ダンプ、トラック、クレーンなど70台もの重機と、総勢400名の隊員が派遣された。電線や道路の復旧、炊き出し、救援物資輸送支援等、昼夜の別なく働き続け、岩内町復興の大きな後押しとなった。

また岩内大火の派遣は、昭和29年の陸上自衛隊北部方面隊発足後、北海道における初の災害派遣となった。

電柱復旧作業
(写真提供 陸上自衛隊)



自衛隊設営テント、高台小裏、町営グラウンド付近。後ろに見えるのは当時の岩内高校（スライド資料より）





全国各地より届く支援

岩内大火のニュースが広がるとともに、全国各地からの暖かい支援が続々と岩内へ届いた。日赤に託され岩内へ送られた衣類、生活用品等の総数は約67万点、8,400梱包にもものぼり、これから冬を迎える多くの罹災者の助けとなった。

山なす、真心の品
北から南から激励文も続々





日本赤十字社北海道支部の支援活動

岩内町は大火の翌27日午前には災害救助法適用となり、午後には日赤の救護班三班が岩内に到着、15日間延べ三千人以上の負傷者を救護した。また道内外から送られる救援物資の受け皿となり、梱包などの作業で学生のボランティアも活動、日赤を通しての岩内支援の輪は、直接、間接的にも大きく広がっていた。

(←)アスバラ坂を下る日赤救護班のトラック。

支援物資の配送(→)

(写真提供 日本赤十字社北海道支部)



日通救援トラックの死亡事故

災害支援の進む中、二次災害ともいえる事故が発生した。29年9月30日、岩内への救援物資を満載した、日通小樽支店のトラックが稲穂峠七合目付近で崖下に転落、運転手山口鉄雄さんが死亡した。この事故は学校に避難していた大火被災者と教職員にとって、自分たちのために犠牲者が出た事として聞き流すことの出来ないものであった。誰からともなく話が進み、被災者たちは乏しい財布から4,110円を集め、教育委員会を通じて山口さんの遺族に届けられた。

稲穂トンネル仁木側出口付近に現在もある慰霊碑と当時の新聞記事

復興の原動力② たくましく立ち上がる人々の姿

焼け跡に立つ若い夫婦と子供たち。背後に漁協の建物



雪の積もる寒い頃。給水車からバケツに水をくむ母さんたち。子供を背負っている



延焼をまぬがれた高台石山商店の前。若い女性が風呂敷荷物に、前を向き颯爽と歩く



「罹災者に限り原価大奉仕!」瓦礫の中、生きるためにまず商売を始める



大和通り付近の焼跡。親子か。山側に蓮華寺の屋根が見える





バラック住宅地の井戸で水をくむ母さん。やはり幼子を背負う

昭和30年夏の岩内駅前「岩内復興港まつり」の立看板



小学校の様子。多くの被災者の避難所となった学校は、生徒が一時的に別の学校へ分散して通い、すし詰め状態で授業を受けた



昭和30年8月 舟谷店前にて5人家族

大火後一年で再建した、大浜の守谷商店



国道沿いの商店街。新しい建物が次々と



昭和31年のギンザ通り商店街。東に向かい、突き当たりが壁坂交差点。ギンザ通りは両側が全焼したが見事に復活。馬そりに便乗する人々の表情もにこやか



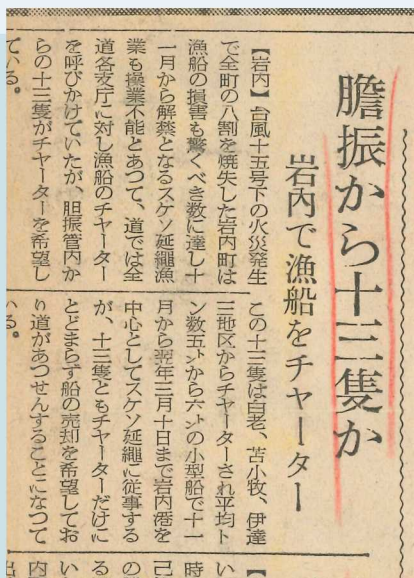
復興の原動力③ 再建—なりわいを建て直す



雪の積もる浜で船の準備が早急に行われた。



出漁の合図を待つスケソ船団(大火スライドより)



(←)昭和29年10月11日付
北海道新聞

「岩内再建の鍵を握るものはスケソ漁であるが、船を、家を、加工所を焼かれて借金だらけで着業した漁業関係者たちの、心からの願いがかなってか、このところ豊漁が続きしかも値がよいので、浜は復興景気に連日沸いている」

昭和30年1月31日付
北海道新聞(→)



不屈の精神で漁業再建

大火の被災漁船は、大小計135隻。機械や製品等も合わせた被害総額は、1.5億円あまりにも上った岩内の漁業。この年のスケソウダラ漁は、不可能とされていた。しかし罹災漁民たちは、町を再建するためには出漁しかないと奮闘。国や関係機関に着業資金借入れを強力に申し入れ、1億5千万円余の長期貸付が決定したのである。

大火からわずかひと月半後の11月7日未明、出漁初日のこの日は新造船、補修船、チャーター船など140隻のスケソ船団が復活し、焼跡から出漁した。帰港は午後4時頃。次々と陸揚げされるスケソは加工場へ運ばれ、翌8日には無頭ガラなど加工品が、岩内駅から出荷された。

漁協のデータによると、昭和29年度11月のスケソ出漁日は19日間で、漁獲高は760万尾、9千万円と豊漁であった。

島野村との合併

昭和30年4月、西隣の島野村が岩内町と合併した。岩内町と島野村は歴史上、開拓の起源を同じくし、ともに漁業を根幹として発展してきた近しい関係にあり、以前より合併の機運があったが大火を機に実現し、新岩内町が誕生した。

合併による行政能力の強化、総合経済力の向上は、岩内町の復興に大きく寄与した。「岩内あつての島野、島野あつての岩内」と言われる互恵の精神が、その後の町を大きく前進させたのである。

面積

岩内町	5.29km ²		
島野村	67.15km ²	合併後	72.44km ²

人口

岩内町	23,860人		
島野村	2,382人	合併後	26,241人



合併記念写真。山本岩内町長と工藤島野村長を中心に、当時の職員



岩内駅前通り。従前の地図(左)と換地図(右)。
大火後は道幅を広く、街区も綺麗に整備された。従前の地図とは、都市計画に利用する為、1952年完成の現況図を元にした焼ける前の岩内地図であり、換地図とは、土地区画整理のため大火後に作成された、新しい岩内町地図。

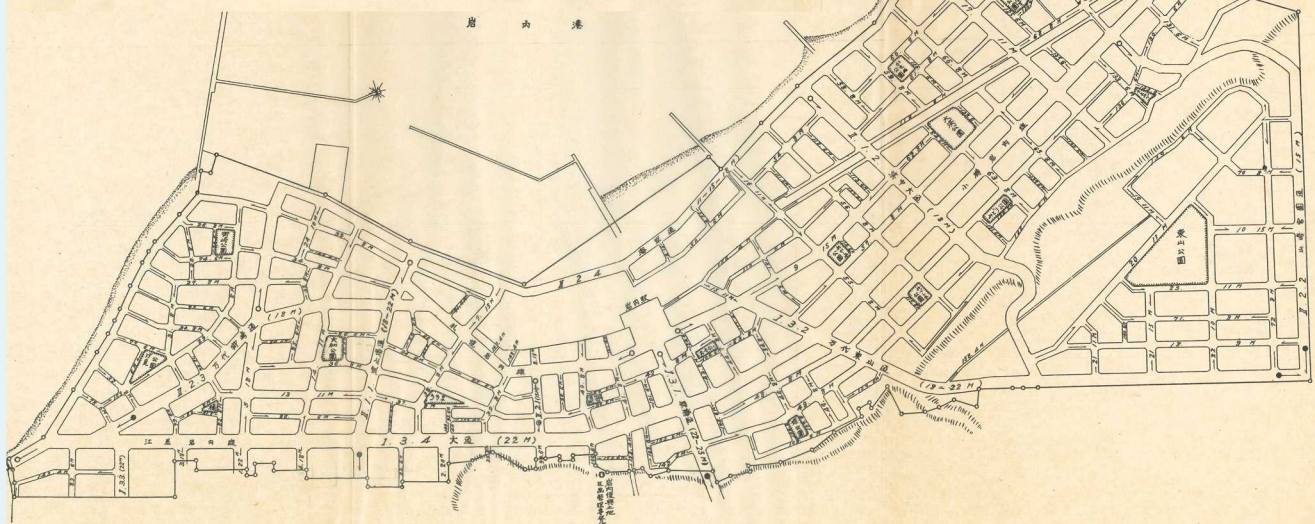
火災復興土地区画整理

町では大火の三年前より「都市計画委員会」を設置し、作業のための航空写真と詳細な現況図を作成済みであった。この資料の存在が、焦土からの復興計画に役立つこととなった。

道庁の技師水島八郎を筆頭に、新岩内町の土地区画整理事業が速やかに開始された。最重要課題は「燃えない町づくり」。不規則雑然と並び一夜にして燃えた町から、防火体制の強力な、近代的都市を再建する事であった。

昭和32年11月、復興都市計画は竣工。幹線道路を拡幅し、防火帯となる公園広場が新たに16か所設置され、新しい町並みが完成した。

岩内町火災復興都市計画図



1957.道土木部「岩内都市計画事業火災復興土地区画整理誌」より



大浜の木造仮設住宅の建設（バラック住宅）

被災者住宅の問題

大火で家を失った罹災者は17,000人以上にのぼり、そのほとんどが各学校や寺院、公共施設などで被災生活を送った。町では、仮設住宅をまず900戸、大浜地区に建設したが、急造された通称「バラック」は、一戸5坪の粗末なものであった。その後次々と公営のブロック住宅が町内各所に建設され、すべての罹災者が改良住宅へ移ったのは昭和45年、16年越しの公住建設事業であった。

総工費は道補助、国庫補助含む約5.8億円。この時岩内町の公営住宅保持数は1,742戸。町村では全道一の数を有した。

栄団地（昭和31頃 ブロック住宅）



東相生団地（昭和44頃）



相生団地（昭和39頃）



みどりが丘団地（東山 昭和43頃）

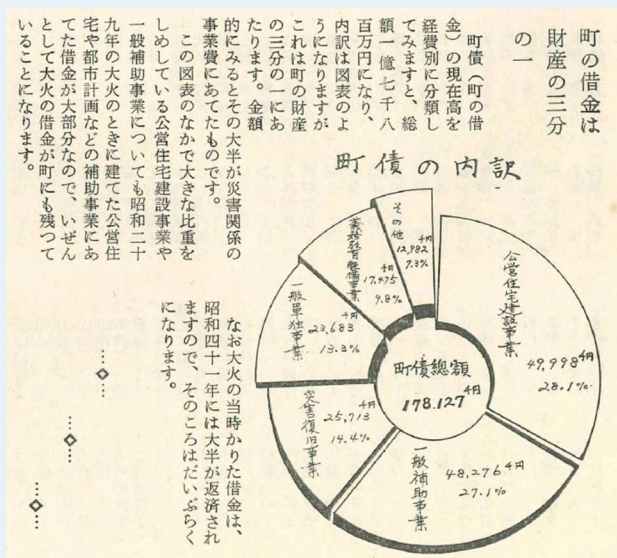
写真の団地は2024年現在いずれも解体除去されている。

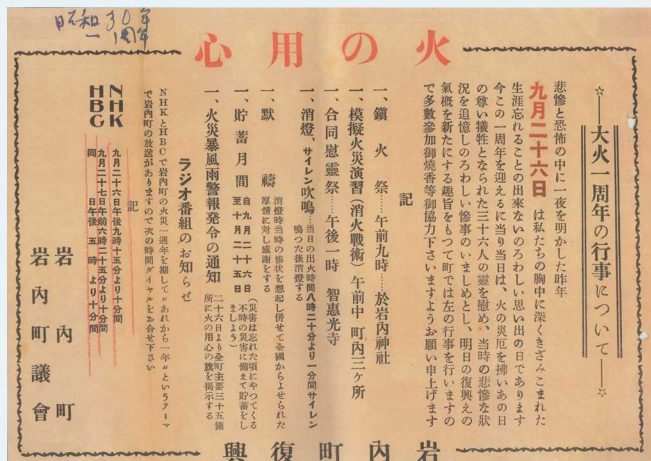
大火の借金

「昭和29年の大火の時に建てた公営住宅や都市計画などの補助事業にあてた借金が大部分なので、依然として大火の借金が町に残っていることになります」（「広報いわない」昭和37年12月 →）

公営住宅の建設と保全管理は、負債として長年にわたり町財政を圧迫した。老朽化による建て替えなどで、すでに廃屋となっている団地が、今も除去されずに町内各所に残っているのも現状である。

しかし、大火後に住む場所を得たことで、多くの罹災者が町から流出することを防いだともいえる。岩内町民の多くが、長く住んできた故郷にとどまり、その後の復興発展に勤しんできたという歴史がある。





「大火一周年の行事について 岩内町 岩内町議会」

1955（昭30）年、大火一周年

「この一周年を迎えるにあたり当日は、火の災厄を払い、あの日の尊い犠牲となられた三十六人の霊を慰め、当時の悲惨な状況を追憶しのろわしい惨事のいましめとし、明日の復興への気概を新たにすする主旨をもって、町では左の行事を行います」

大火一周年の9月26日、町では鎮火祭、合同慰霊祭などをとり行ったほか、NHKとHBCで「あれから一年」というテーマのラジオ番組が放送された。



1964年、岩内町大火十周年記念式典の様子。この十周年式典を境に、岩内町で主催する記念式典は開催されなくなり、消防の防災訓練があるのみとなった。「悲惨な被害を思い出したくない」という声に配慮したものだという。今年の70周年記念式典は、町で開催する60年振りのものとなった。

1964（昭39）年、大火10周年と映画「飢餓海峡」岩内ロケ

大火10周年の昭和39年9月、水上勉原作の映画「飢餓海峡」の岩内ロケがあり、監督の内田吐夢をはじめ、三國連太郎、伴順三郎など総勢50名のロケ隊が岩内へ。駅前や朝日温泉などで撮影した。宿泊は当時の宇喜世旅館で、伴順三郎はロケの合間に、駅前通り交差点で厚生園の子供たちのための募金活動をしたという逸話がある。



俳優三國連太郎と町民エキストラ。岩内駅前の撮影



水上勉（左）と木田金次郎。昭和36年文春講演会の時



大火から生まれた名作「飢餓海峡」

昭和36年岩内青年会議所は、岩内で文藝春秋文化講演会を企画した。木田金次郎の紹介を得、講師に招かれたのは、柴田錬三郎と臼井吉見、そして直木賞を受賞したばかりの新進気鋭作家、水上勉であった。

水上勉は、講演の前に訪れた雷電海岸の絶景に感嘆。そして洞爺丸事件の同日に発生した岩内大火について初めて知り、この二つの事件を発端とする社会派推理小説「飢餓海峡」の構想を得た。翌昭和37年1月より週刊朝日にて連載が始まるとたちまち大ヒットし、この名作は水上勉の代表作となった。映画化は昭和39年。また舞台脚本にもなり、後年岩内の演劇集団「岩内市民劇場」でも上演している。



名店街だより 大火特集 1994年9月号



6ヶ月後 すさまじい復興を見せる街並み



1994（平6）大火から40年

岩内大火の歴史を伝える取り組みは、民間の有志から始まる。平成6年には岩内名店街の経営者たちが「名店街だより 岩内大火特集号」を編集発行。洋品店経営の今井郁夫氏が当時撮影した、大火直後の町並み、半年後の復興の様子など、貴重な写真を数多く掲載し、大火の歴史を伝えた。

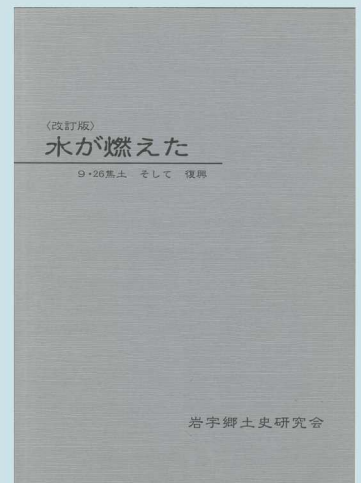
2004～2019 （平成16～令和1）年

平成16年は大火から50周年。「岩内大火50年復興記念事業」実行委員会が有志によって組織され、数々の記念事業が行われた。演劇集団「岩内市民劇場」による「飢餓海峡」の公演、また大火を実際に体験した劇団長の坂井弘治氏が、岩内町を舞台としたオリジナル脚本「焦土を越えて」「わが町」を製作。大火テーマの連作として舞台公演された。

平成3年頃から町史編纂に携わっていた細田時友氏の元には、その詳細な調査記録が保管されていた。これを元に岩宇郷土史研究会が中心となり、岩内大火資料集「水が燃えた 9・26焦土そして復興」が編集・刊行された。この資料集は大火60周年の2014年に、新資料を加え「改訂版 水が燃えた」が刊行されている。

平成20年にリニューアルした岩内町郷土館では、大火の常設展のほか、周年ごとに企画展を開催、岩内大火の歴史を伝えている。令和1年には犠牲者の慰霊祭、大火経験者が語り合うイベントも開催した。

↓ 岩内市民劇場公演ポスター



「水が燃えた 9・26焦土 そして復興」

2024（令和6）年、大火70周年

岩内町主催の「岩内大火復興七〇周年記念式典」は、令和6年9月21日、岩内地方文化センターにおいて開催され、町内外より約350人が参加した。町では大火の9月26日を「岩内町防災の日」と制定。災害に強い町づくりをめざし、未来世代へ向け、大火の歴史の伝承を誓った。



岩内大火復興70周年記念式典
（岩内地方文化センターにて）



記念パンフレット表紙題字を岩内高校書道部が揮毫した。

岩内大火の体験談

2024（令和6）年、岩内大火70周年にあたり、実際に大火を経験した方、また体験を伝え聞いている方に、体験談を募集しました。町内外より集まった一人一人の貴重なお話から、新たな発見も得ることが出来ました。皆様ありがとうございました。

なお岩内町郷土館では、継続してこの聞き取り活動をすすめています。皆様のお話をぜひお寄せ下さい。

○大火は中学卒業の年（男子）、夜学に通い御崎のラムネ工場で働いていた。大火の夜、港のドラム缶が花火のように大きく爆発していた。恐ろしい光景だった。公園通りは道路に火が走っていた。家は島野村の野東川河口岩野橋近くで、延焼はなかった。橋を渡って避難してきた人は、背負った荷物に火が付いたまま走ってきたので、橋のところで水を用意してかけてやった。家の天井は台風の風で飛ばされ夜空が見えたが、火事で真っ赤な空だった。翌日ラムネ工場の焼跡に行くと砂糖が燃え残っていた。仕事もなくなり失業保険をもらったが、すぐに仮設バラックの電線工事の仕事に。木造バラックの屋根裏に入ったが、柱も何もない急造の粗末な建物だった。

○大火当時中学2年（女子）、万代に家があった。家にいると消防の人が来て「早く逃げれ！ 死にたいのか！」と怒鳴られた。父は出かけており、下の妹二人を親戚に預けバラバラに逃げた。黒田商店からリヤカーを借りて家財を乗せ、火の迫る中を西小まで走ったが、すごい大風でリヤカーごと浮き上がり、とび跳ねるようにして逃げた。妹たちは、はじめ本弘寺に逃げたがそこにも火が迫り、大人達に連れられて共和の方まで逃げた。翌日再会できた時は、抱き合ってわんわん泣いた。

大浜の下水の溝で死んでいる人や、崖下で馬が死んでいるのも見た。家の焼跡に行くと、芋やサケがほくほくと焼けていた。机の上に置いてあったはずの陶器の貯金箱が、がれきの上にポツンと残っていて、中身は無事だった。もう何から話せばいいかわからないくらい、凄かった。

○当時小学校1年（女子）、火災から避難することになり、母と別々に逃げた。初めは母に言われて姉と二人で知人宅へ行ったが誰もおらず、たまたま隣の人「その家はもう逃げたから、あんた達阿久津倉庫へ逃げなさい！」と言われて倉庫へ。近くにある日本ビタミン肝油工場が激しく燃えて、倉の窓のスキマから火の粉が入ってくるのを、どこかの女性が水に濡らした布を包丁に巻き付け、スキマに差し込んで塞いでいた。母は小さい弟を背負い、崖を登って墓地までたどり着いて助かった。弟が背中で「熱い熱い」と泣いたが、軽い火傷ですんだ。この崖を登れなかった多くの人が亡くなった。次の日、阿久津倉庫にいた姉妹を見つけ、母は泣いて無事を喜んだ。

○小さい弟を背負い、東小まで走って逃げた。東小のガラス窓一面に火が写って真っ赤になっていた。学校が燃えたかと思った。（小学校は延焼を免れている）

○母から聞いた話です。大浜の守谷商店の娘で、3歳位でした。火災当時、一家で店にいて、大浜までは火が届かないと思っていたが、高台の電電公社にいた親戚から「避難した方がよい」と電話があり、早めに山側へ逃げたそうです。火が迫る前に移動したので、父母と姉妹3人、お手伝いさんの6人全員無事だったが、店舗は全焼。しかし風向きが変わったせいか、店の裏の家は全く燃えなかったそうです。

守谷商店は、大火後一年で再建しました。

○大火の時は余市にいたが、知らせを聞いてすぐにかけつけた。岩内への列車が来ないので、小沢から岩内へ向かうトラックに乗せてもらった。御崎にある実家は、倉に守られたのか延焼は免れた。消防が、他はダメだがこの家は何とか助かるとみて、重点的に水をかけてくれたらしい。おかげでこの並びで一軒だけ助かった。しかし家財を本弘寺に避難させたのだが、寺と一緒にすべて燃えてしまった。また、大火後に建物が無事だという事で保障がもらえなかった。

○国道から佐久間の坂（ダルマヤから光照寺への坂、大火の消火地点）を上がって光照寺に行こうとしたが、あまりの風の強さですぐ目の前の道が渡れない。それほど強い風が吹いていた。

○大火当時9歳位（男子）、夜寝る用意をしていたが、兄が「空が赤い」と言い火事に気付き、兄二人と弟二人、自分と病弱な母とで避難した。長く歩いて大浜へ行ったが、ここが危なくなっただけで今の老人施設（七福神）のところにあった建物の二階に避難した（当時は日本ビタミン肝油会社）。この付近一帯は逃げる人で大混雑していた。駅前十字街を見たら火の海で、建物が崩れ落ちるのを見た。さらに火が迫ってきて、歩いて坂の上（現ラッキー付近）まで上がると、強風で飛ばされそうになった。三度目に避難したのが当時宮林署の近くの（アスパラ坂の山側）親戚宅で、ニワトリ小屋で寝起きた。朝夕が寒かった。

食べ物はいくら配給の乾パンで、便所は畑に穴を掘った。自衛隊の救援が来町し、仮設の風呂が設置された。元の市街地は見渡す限り焼け野原で海がすぐそこに見えた。学校は避難所になり、自分たちはしばらく通えなかった。

全国各地から、様々な商売人が来ていた。

○当時小5（男子）。湯殿山の近く（光照寺の東側）に住んでいた。小さい妹を祖母が背負い、母と自分とで、火元の相生の方へ逃げた。「火災の時は火元へ逃げろ」と昔から言われていた。父は知人の家が延焼していたので手助けに行っていた。港のドラム缶が、花火みたいに爆発していた。自宅に延焼はなく、翌日からしばらく東小は休みになった。宮園の三叉路のところで自衛隊が炊き出しをやっていた。高校の下を流れる川がとてもきれいだったので、その水が使われていたと思う。アメリカ進駐軍からの支援物資で、生まれて初めてチーズを食べた。

○家は壁坂通りの老舗酒屋。大火時中学生だった（男子）。父が御崎にある倉庫が心配で、様子を見に行っただけでそれきりだったので、死んでしまったと思いこんだが無事だった。風が強くなり隣の風呂屋の煙突が倒れ、酒屋の工場の煙突が倒れてきて、避難をした。自分と母と妹二人、お手伝いさんの5人。壁坂を上っていったが、火が迫ってきて高台小へ、そこもいっぱいになってきたので岩内高校まで逃げた。高台から見ると、港の重油ドラム缶が爆発炎上していて、火をまき散らしていた。大きな道路は道に沿って火が走っていた。

○御崎の国道沿いに住んでいた。相生、清住から火が迫ってきたが、火は家と倉の上を強風で飛び越え、奇跡的に焼けなかった。親に連れられて安全な場所を求めて避難、はじめは高台、戻って相生へ…。

○大火当時小5（男子）。大火の夜、電電公社の父から「火事が出た」と連絡があり、家で様子を見ていたが住んでいた宮園付近へ延焼は無かった。物凄い風の中停電となり、家の便所が突然天井まで吹き上げた。外の汲取りのフタが飛ばされ、風圧で中身が吹き上げられたらしい。会社に様子を見に行っていた父が帰って来てから、一人で光照寺まで様子を見に行った。港の重油が花火のように爆発して空に上がり、火のついた船がどんどん流されていくのを見た。光照寺までの道は木がすべてなぎ倒されていた。翌朝はすごい快晴。家の離れにある物置に、知らない人がびっしりと避難していてびっくりした。ヘリコプターが飛んで、米軍のジープも町に来ていた。

次の日から高台小は休みになり、数日後から3年と1年の妹を連れて島野小へ一ヶ月くらい歩いて通った。遠くて大変だった。

八幡通にすぐに小屋掛けの店が立ち並び、ナベ釜あらゆるものを売っていた。光照寺の崖上から毎日町の様子を見てみると、日に日に建物が増えて、町が元に戻るようで嬉しかった。子供心に凄いなと思った。

○祖父から聞いた話です。漁師で清住に住んでいました。大火の日、火元が近くすぐに大浜に家財道具を運び出したが、家は燃えることなく大浜にやった家財一式がすべて燃えてしまい、おまけに新造したばかりの船も燃えてしまったそうです。祖母は役場の炊き出しに手伝いに行き、炊き立てあつあつのごはんで何十個とおにぎりを握ったが、次から次へあつという間に無くなったそうです。その後一家で南栄の狭い団地へ移りました。大学生の息子は、大火で学校をやめ実家に戻らねばと思っていたが、卒業させてもらい、のちに教師になったそうです。

○大火当時、高台小学校の先生になって2年目だった（女性）。高台小学校は避難所となり、一ヶ月くらい休みになったが、炊き出しの手伝いで毎日おにぎりをたくさん作った。

○大火当時は5歳（男子）、御崎に住んでいた。午後8時頃、祖母と兄弟3人で早めに避難をした。「火元に逃げろ」という昔からの言い伝えがあったので、祖母の知人で、当時まだ3軒あった、清住の遊郭の一軒に避難した。物凄い風が吹いていて、中通りから広い中央通りに出たとたん、風で飛ばされゴロゴロと転げまわった。

○大火の時は小学校3年（女子）、栄の江川商店裏手に家があった。火事ときいて、中一の姉が未就学の小さい妹を背負い、姉妹3人で相生の親戚の家へ逃げた。「最後は火元に逃げろ」とよく聞かされていた。親はリヤカーに荷物を乗せて、別々に逃げた。家を出る前、首からカバンをたすきがけに、持てるだけ何個も重ねて持たされた。強風の吹く風上に向かうのが大変で、姉が何度も「頑張んなー」と声をかけてくれて、必死に逃げた。校舎のガラス窓一面に火が写って、西小が真っ赤に燃えたように見えた。（学校は延焼していない）

家の焼跡には何一つ残らず、すべて燃やされた。大火の日は日曜で、母がお汁粉を作って「明日食べようね」と言っていたのだが、お汁粉の鍋が焼けて固まっていた。着るもの一つなく、母はなぜかミシンの頭だけ持ち出していた。大火後は母も働きに出て、暮らし向きも大きく変わった。

○当時、後志支庁職員の回想録より。岩内大火の日、仕事で万代の宇喜世旅館に宿泊していた。夜半にサイレンが聞こえてきて火事と知った。同僚と、服の上から旅館のどてらを羽織って、両手にナベ釜を抱えて壁坂に向かい、屋根のトタンなどが飛び交う中を、発足の役場まで全力で走って逃げた。よくあの距離を走れたものだと思う。

○大火当時は4歳（女子）、清住の一軒家に住んでいたが、大火で全焼した。親と兄弟6人で避難、長男が自分を背負って逃げてくれた。犬を一匹飼っていたが、放してやれなかった。大浜の知人宅に一時身を寄せたある日、近くに大きな白いテントがあって、はぐって中に入ると、白い着物の人が4,5人寝かされていた。帰って母に話したら「そんな所に入ってはダメ!」とひどく叱られた。火事の犠牲者と後で知った。学校の避難所では「いっぱい人がいるんだから、静かに過ごさなければならんよ」と母に言われた。沢山の人に世話になったのは感謝しかない。

のちに宮園バラックへ。粗末な屋根で大雨が降ると雨漏り。天井に星が見えた。父が漁師で、寝る時に寒さしのぎに魚臭い合羽コートを着たまま寝ていた。その後東山の新しい改良住宅に移ると、ふすまに瓢箪の絵がついたようなきれいなところで、あまりの嬉しさに床を転げまわって喜んだ。

真狩の芋ほりに行き小学校を転校したが、ほとんど学校に行けなかった。スケソ大漁で、父がお饅頭を貰って来た時など、楽しい記憶もあるが、大火で一家8人まる裸にされ苦労した。辛かった。

○大火当時は3歳（女子）、大和に住んでいた。父は漁師で、大火の日は海に出ていて不在、母と兄弟4人で避難した。母が一番小さい弟を背負い、一番上の12歳の姉と、兄が自分の両手をそれぞれつかんで走って逃げた。初めは、大浜の母の実家に行こうとしたが「大浜にも火が回っているからダメだ」と止められた。島野村の斉藤漁場が親方だったので、そこに逃げた。のちに宮園のバラックに移った。

○大火当時小学校4年（女子）、御崎に住んでいたが、家は運よく燃えなかった。しかし避難中に大風の中飛んできたトタンが当たり、顔にケガ、血まみれになって逃げた。保健所（現郷土館の場所）のところで石倉先生が救護していて、手当てしてもらった。

○祖父から聞いた話では、大火の前日に札幌に息子と出かけていて、次の日岩内へ帰ろうとしたら、大火ということだった。札幌から小沢で降りて、岩内線に乗り込んだが、被災した岩内駅まで列車は行けず、乗客は前田駅で下ろされて、そこからみな歩いて岩内へ向かった。妻は29年大火の年に生まれ、一家は発足に疎開したそうだ。その後宮園バラックに入ったが、一家9人で5坪のバラックは本当に狭かったそうだ。

○父から聞いた話です。今でいう岩内ニューシネマの近く（万代壁坂通り西側）に住んでいて、父は当時10歳、両親と兄弟6人で火の中を逃げたそうです。東山の崖を登り切って助かったが、登れなかった人が下でたくさん亡くなったそうです。港では、人の乗っていない焼けた船が流されていくのを見たそうです。大火後は東山のバラックに入り、鍵も粗末で閉まらない玄関。ドロボウに入られて、畳の下に入れていたお金を盗まれたそうです。

○大火当時小学5年（男子）、万代の羽根豆腐店のそばに住んでいた。大火で家の全員で東小へ向かった。リヤカーに荷物を乗せたが、すべて強風で飛ばされ、神社坂を上って身一つで東小へ避難。それから一ヵ月ほど東小で過ごし、岩内を出た。



企画展示室の様子

今回の総展示資料数は、写真、印刷物、映像あわせて140点余りとなった。写真は、大火前の町並みと、54年9月26日大火発生直後から、数年後の復興完成後までを主に展示。また、同じ地点からの航空写真が、大火直後と5年後の59年のものが残っており、今回ドローン撮影技術を持つ、地域おこし協力隊柴田溪さんのご協力により、同じ角度からの空撮が実現。大火から70年の、町並の変化を記録することが出来た。



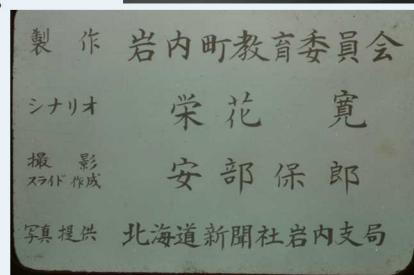
岩内大火の資料

郷土館の岩内大火の資料は、常設展示に加え写真や役場の資料などがあるが、多くを占めるのが、北海道新聞、北海タイムス、朝日、読売など当時の様子を報道した新聞記事である。それらの記事を小から大までスクラップし、日時の経過とともに記録を残した人が、佐藤彌十郎（郷土史家）をはじめ、町内に何人もいた。これが現在まで残されている、貴重な岩内大火の資料となっている。

当時岩内では、町内の地元新聞も複数あり、大火直後に無償奉仕で役場からの緊急声明を印刷発行、災害時の情報発信に貢献もした。

初公開の映像資料

焦土と化した町内には、カメラなどほぼなかったが、当時小樽に住んでいた清水良平氏は、大火翌日に岩内の実家の様子を見に列車に乗り込んだ。その時所持していた8mmカメラで、現地の生々しい様子を撮影、貴重な記録を残した。また教育委員会では、道新岩内支局の協力を得て、岩内大火のスライド記録を製作。学校の授業で使用していたと思われる。当時の教師栄花寛氏がシナリオを書き、安部保郎氏が撮影した。この中にはこれまで公開されていない画像もあった。



映像公開の様子(左)と缶に入った状態のフィルム（マルコー清水より寄贈）

大火スライド（安部保郎氏ご家族より寄贈）

この度の企画展開催に際しご協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げます（敬称略）

日本赤十字社北海道支部
陸上自衛隊
木田金次郎美術館

柴田 溪
松田晃一

岩内大火の経験談を寄せて下さった皆様

2024（令和6）年度
岩内町郷土館 第三回企画展
岩内大火復興70周年記念展 生まれ変わる岩内 復興の原動力

2024年10月31日発行

編集/発行 岩内町郷土館（ぱとりあ岩内）
岩内町清住5-3
TEL 0135(62)8020

